

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第58号

平成29年12月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

楠氏の菊水の家紋、水流に二流が存在

如意輪寺、楠妣庵観音寺は「右から左へ」

一方、建水分神社、湊川神社等は「左から右へ」

### 如意輪寺本堂内部の柱に残る菊水紋

楠氏の家紋、菊水については、楠正行通信第9号で触れました。楠氏の産土神社である建水分神社（千早赤阪村）の御略記には、以下の通り記されています。

当社の社紋の菊水は楠木氏の家紋としても世に知られる。その名のごとく上半分が菊、下半分が水の流れを表す。

紋様の由来には諸説あるが一説に、皇室御紋である菊は後醍醐天皇より正成公のその忠誠に対し下賜され、水流は楠木氏が氏神として崇拝した当社が水の分配を司る水神であるためとされる。

正行研究を進めていくと、この楠氏の菊水の家紋について、新たな発見がありました。というよりも、新たな事実が明らかになりました。

家紋の下半分の水の流れに、二流のあることが分かりました。一つは、通常、よく知られる左から右へ流れるもの、そして今一つは、逆に、右から左に流れるものです。

如意輪寺（吉野山）の副住職、加島裕和様から送っていただいた写真データ（↑上の写真：如意輪堂本堂内陣の柱に残る菊水の家紋、そして私の手元にある楠氏ゆかりの寺社の略記を以下掲載します。



宗教法人

楠妣庵観音寺

臨済宗妙心寺派（禪宗）

楠公史蹟（河南八郎第二蹟）  
河内西国鹽場二十番札所

### 寺社略記で違い明確に

事の発端は、如意輪寺加島副住職から、「扇谷さん。本堂内陣の柱に係る家紋は、すべて右から左に流れています。」とのお話をお聞きしたことです。

これは確かめなければと、建水分神社に岡山博美禰宜を訪ね、菊水の家紋の水流の流れに二流あることについてお伺いしました。

岡山禰宜は、「扇谷さん。

建水分神社の社紋の菊水は左から右に流れています。が、楠妣庵観音寺の家紋は右から左に流れています。

楠木正成公亡き後、正行の代に入り、楠氏の隆盛を願い、今一度歴史の流れを変えようとの久子の方の強い思いから、水流の流れを変えたと伝わっているようです。」

何度も訪れた楠妣庵観音寺であったが、この水流の違いには気付きませんでした。

そして、建水分神社を訪れた日の午後、南北朝時代の名将：楠木

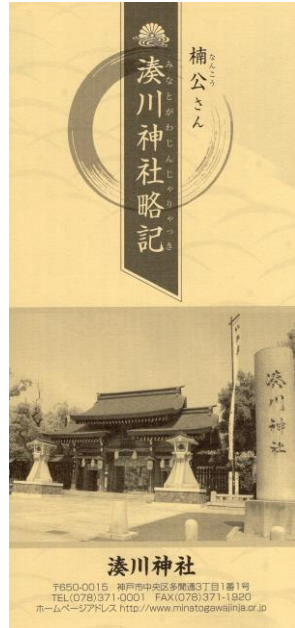


建水分神社

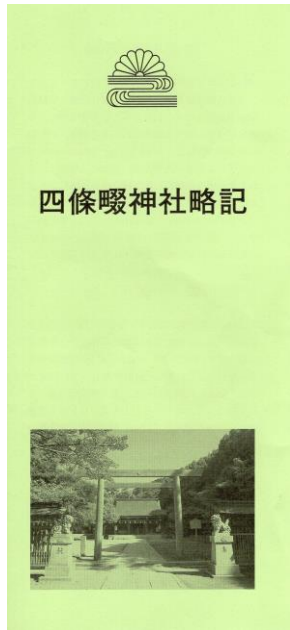
御略記

正成公を学んで、現代の父・子を考察しようと、富田林市、千早赤阪村、河内長野市、河南町等、南河内を中心に活動される『楠公さんを学ぶ会』の幹事会に招待を受け、出席しました。

同会のリーダーであり、同会の楠公さん講座の講師



を勤めるなど楠氏研究者の



お一人である杉本秀雄さんは、「扇谷さん。四條畷神社の菊水紋の水流の流れは間違っていると、神職にお伝えしました。」とお話しされました。

正成、正行の誕生地である当地では、菊水の流れに二流あることは常識のようでした。

### 久子の方の強い思い

#### 楠木の木を取り、水流を変える

楠妣庵観音寺発行の絵ハガキ「大楠公夫人絵伝」の一枚には、『楠木の二字、正行に至り楠の一字となせり』と記されています。

同様に、久子の方は、正行の代に入り、家紋の水流の流れを変えることによって、父、正成の死を乗り越えて、父の遺訓を果たさせようとしたのではないかと、思われます。

この二つの話は、楠氏の義を貫き通す一途な生き方を表したものであるのではないのでしょうか。

(注) 如意輪寺：四條畷の合戦を前に、正行が後醍醐帝の墓に詣で、後村上天皇に別れの挨拶をしたうえで、如

意輪堂の板扉に鎌で辞世の歌を刻んだ。楠妣庵観音寺：正成、正行戦死後、久子の方が菩提を弔うため入られた。建水分神社：楠氏の産土神社。湊川神社：湊川の戦いで戦死した正成、正季らを祀る神社で、別格官幣社第1号。四條畷神社：四條畷の戦いで戦死した正行、正時らを祀る神社。往生院六万寺：四條畷の合戦で正行が本陣を構えた本陣跡が残る場所。

### 談山神社、例大祭に出席

扇谷は、11月17日、この日が命日にあたる藤原鎌足を祀る談山神社（桜井市多武峰）の例大祭に出席しました。

例大祭には、藤原氏の末裔の方や如意輪寺副住職を始め多くの寺社仏閣の代表者らが参列され、厳粛に執り行われました。また、本殿前の石の間では、南都楽所による舞楽が奉納され、多くの参拝者が見入りました。

談山神社と正行の縁は、如意輪寺に残る森田雪斎の「楠左衛門尉髻塚碑」に記されています。この碑は森田雪斎が撰文したもので、藤原鎌足を祀る談山神社の立派さに比べて、正行の髻を埋めた場所が荒れ果て、草に埋もれていることに涙し、運不運の差はあっても、二人の功績は同じではないか、と正行の髻塚を顕彰したものです。

直会の席では、談山神社の長岡千尋宮司と楠氏談義をすることができました。

長岡宮司は、楠氏のことには大変詳しく、明治維新の礎は一に楠木正成、正行の活躍によるもの、と意見が一致しました。

正行研究をご縁に、正行顕彰の機会をいただき、参拝

者の方との交流ができたことに感謝します。

なお、この日の紅葉は素晴らしく、観光バスや乗用車で訪れる人が後を絶たず、境内は人の波でいっぱいでした。(写真：紅葉に囲まれる談山神社十三重塔)

重要文化財の十三重塔は、藤原鎌足の追福のため、子、不比等らによって建立されたもので、現存の塔は享禄5年(1532)の再建で、木造の十三重塔としては世界唯一のこと。高さは約17メートルで、神仏習合時代の名残でもあり、談山神社のシンボリック的存在。

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)

